教科等研究会（小学校社会部会）

令和６年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

社会とつながり、ともに生き方を問い続ける子どもを育てる社会科学習

２　研究経過

第１回			第２回			（中・高学年部別日で実施）第３回			第４回		
期日	人数	場所	期日	人数	場所	期日	場所	授業者	期日	場所	授業者
6/9	22人	飯野小	8/21	17名	通潤橋 清和文楽館	10/25 10/29	津森小 龍野小	木下　亮 岩永　光央	1/23	高木小	山本　大

３　研究の概要

(1) 研究の内容

① 研究主題設定の理由

本研究部会では本年度の上益城郡教科等研究会全体テーマ「児童生徒一人ひとりが輝く『分かる・できる』『楽しい』授業づくり」を土台とし、令和６年度熊本県小学校社会科研究会研究主題、現代の社会の要請や目指す子ども像から、本年度の研究テーマを「社会とつながり、ともに生き方を問い続ける子どもを育てる社会科学習」として研究を進めていくこととした。

○　社会の要請

令和５年３月に、中央教育審議会から「次期教育振興基本計画」という今後の日本の学校教育の方針を示した答申が示された。答申には２０４０年以降の未来の日本を見据えて、子どもたちにどのような力を学校教育で身につけさせていくべきか書かれている。答申によると現代社会は、VUCA（ブーカ）と呼ばれる状態にあるとされている。

V（Volatility：変動性）
U（Uncertainty：不確実性）
C（Complexity：複雑性）
A（Ambiguity：曖昧性）

VUCA（ブーカ）の名称の由来

VUCA（ブーカ）とは、「変動性」「不確実性」「複雑性」「曖昧性」を意味する英単語の頭文字を取ってできた造語であり、一言で言うと、「想定外」の出来事が次々と起こるうえに、近い将来の日本はどうなっていくのか予測の難しい状態ということである。現代の子どもたちに求められる力は、次々と起こる「想定外の出来事」に対して、多様な考え方や立場の他者と協力し合い、課題を解決するためのより良い考えを導き出す力である。

さらに、現在は経済的、物理的な幸福だけでなく、精神的な幸福の追究をしていこうとする「ウェルビーイング」の方向性に国連が動き始めている。これは、一人一人の精神的な幸福度を高めることがより良い社会の形成につながっていくという立場の考え方である。個人の人権に大きな価値が置かれるようになった時代の中で、現代の子どもたちに求められるもう一つの力は、自分は何を大切にして社会と関わって生きていくか、自分なりの考えをもとうとする姿勢である。

○　目指す子ども像

ア　社会的事象を主体的に追究する子ども

「社会に求められている力」を身に付けるためには、まずは子どもたちに社会的事象に関心を持ってもらい、その社会的事象を主体的に追究してもらう必要がある。社会的事象を自分事として捉え、毎時間の学習課題を進んで追究しようとする子どもを育てたい。

イ　社会的事象を多面的・多角的にみる子ども

学習指導要領によると、社会的事象の「多面的な見方」には、大きく分けて３種類ある。

①　位置や空間的な広がり【地理的な面に着目した見方】 ②　時期や時間の経過　　【歴史的な面に着目した見方】 ③　事象や人々の相互関係【関係的な面に着目し見方】

自分とは異なる考え方の友達と対話的な学習活動を重ねながら、多面的・多角的に社会的事象について理解することのできる子どもを育てたい。

ウ　自己の学びを振り返る子ども

単元の学習の終末に、自分の思考の道筋を振り返り、自分の考えがどのように変容したのか、成長を自覚できる子どもを育てたい。

②　研究の視点

視点１　社会的事象を多面的・多角的に捉えられる学習過程

単元を、①問題発見→②問題追究→③問題解決の３つのユニットに分けて構成する。

視点２　主体的に追究し、社会的事象の捉えを創る教材開発

（教材パターン①）子どもが社会的事象を身近に感じる教材

子どもが主体的に学習を進められるように、子どもが問いをもち、調べたい、考えたいと思う教材を準備する。子どもにとって身近であるということを重要視しながら、単に地理的に身近というだけでなく、子どもの興味・関心や経験の有無なども考慮した教材かどうかを吟味していく。また、本部会がこれまでもこだわってきた、地域人材の活用も図る。

（教材パターン②）子どもが矛盾や葛藤を感じる教材

子どもが主体的に学習を進められるように、子どもの中の常識や既成概念をくつがえすような教材を準備することも有効であり、実態にあわせて準備をする。

視点３　自己の学びや成長を自覚できる評価

学習を振り返る機会を設定し、自己の変容を自覚することで、自分の成長を感じて自信をもったり、学びをその後の生活へ意識的に生かそうとしたりする子どもを育てる。

(2) 成果と課題　（部会員へのアンケート結果より）

【成果】

○　授業研究会を年間３回実施できたことで、多くの学びができた。

○　「社会科」では実際に現場まで足を運び教材研究を進めることが重要だと改めて理解出来た。

○　現地学習（通潤橋、清和文楽館）もでき、地域素材の教材化にもしっかりとつなげることができた。白糸台地の人と出会い、その生活や歴史について学べたこと、３つの授業ともに地域教材を取り扱っていることなど、上益城の社会科部会だからこそできる授業実践であった。

○　事前研にしっかり取り組み、協力して授業をつくりあげていく点が部会員の学びにもつながっていた。事前研究会、当日の授業研究会ともに活発な話し合いが行われ、それぞれが多くの視点から学ぶことができた。

○　教科書のみならず、そこから地域に目を向けた取り組みはやはり唯一無二であり、子ども達が地域を誇りに思うことにつながっていくと考えられる。

【課題】

●　授業実践の時期が集中したことで中高学年別の研究会になり、他学年部の授業研究会への参加が難しい部会員もいた。

●　事前研の出席率に課題もあった。実施時間のさらなる工夫や、回数を減らして協議内容を焦点化することも考えられる。

●　授業の検討にあたり、学習指導要領の確認や内容の解釈についての確認が必要な部分があった。

●　実践を通して、資料提示や授業での時間配分、学び合いをどこでさせるか等、見極めが必要な部分があった。また、さらなる発問の精選も必要である。

４　実践事例

(1) 授業の概要

６年　単元名「武士の世の中へ」（東京書籍　新しい社会 歴史編）

【自評】（甲佐町立龍野小学校　岩永 光央 教諭）

○　児童は前時までの学習をもとに、意欲的に課題解決のために活動していた。
○　資料を精選したことで、児童が考えを持ちやすかった。
○　グループでの話し合いをもとに、そこから生まれた問いを考えていく時間が必要であった。
○　教科書の扱いに課題があった。最後に教科書で知識の徹底を図る必要があった。

【指導助言】（甲佐町立乙女小学校　藤川 寛 校長）

○　一人一人の児童が資料をもとに、自分の考えを持つために一生懸命活動する姿があった。
○　学習規律がしっかりと身についており、日頃の指導が児童の姿に表れている。
○　地域素材の教材化がしっかりなされている。前年度の実践とつなげている点もよかった。
○　部会全体で行う授業づくり、活発な研究協議等、社会部会の魅力である。

(2) 学習構想案　（要約版）

単元の目標

我が国の歴史上の主な事象について、世の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、遺跡や文化財、地図や年表などの資料を調べてまとめ、我が国の歴史の展開を考え、表現することを通して、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いを手掛かりに武士による政治が始まったことを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を解決しようとする。

単元終了後の児童の姿

源平の戦い、鎌倉幕府の始まりについて考えることを通して武士がどのような世の中を目指していたのかを理解している。また、元との戦いについて考えることを通して、ご恩と奉公の関係がくずれ、鎌倉幕府が滅亡したことを理解している児童

単元を通した学習課題

武士はどのようにして力をつけ、政治の中心になっていったのか。

本単元で働かせる見方・考え方

世の中の様子や人物の働きなどに着目して、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いなどの出来事を武士による政治が始まったことと関連付ける。

単元の指導計画（７時間扱い）

	時数	学習活動	評価の観点
1	1	○武士のやかたの様子を見て、武士の生活の様子、武士と貴族のちがいなどについて、気付いたことを話し合い、学習問題をつくる。	態度－①
2	3	○平氏は、どのように勢力をのばしていき、なぜ力を失っていったのかについて考える。 ○源平の戦いで、源氏はどのように平氏を破ったのかについて調べ、頼朝はどのような世の中を目指していたのか考える。 ○頼朝は、どのようにして武士たちを従えていったのか考える。	知技－② 知技－① 思判表－①
3	1 【本時】	○蒙古襲来絵詞の絵や資料を見て、御家人たちがどのように元と戦ったかを調べ、元寇後、鎌倉幕府はどうなっていったか考える。	知技－②
4	2	○調べてきたことをまとめ、単元の学習問題に対する答えを考える。	思判表－②

本時の学習

（１）目標

元軍との戦いの様子について、蒙古襲来絵詞などの資料を調べることを通して、武士のたちの思いを考えることができる。また、戦いの後の幕府と武士の関係の変化を考えることができる。

（２）展開

過程	時間	学習活動	指導上の留意事項
導入	5分	１　本時のめあてをつかむ。 （１）　元について知る。 ・日本を従えようとする元とは、どのような国だろう。 【めあて】鎌倉幕府はどのように元と戦い、その後どうなったか調べよう。	○アジアの大国である「元」の領土の範囲について読み取り、日本と比較させる。
展開	25分	２　課題の解決に向けて活動する。 ○元軍と鎌倉幕府と武士たちの戦い方について元との戦いを見て、気づいたことを出し合う。 ○なぜ武士たちは、元という大国との戦いに命がけで戦ったのか考える。 ３　武士たちは、元との戦いに勝ったのに、鎌倉幕府に不満だったのはなぜかを考える。 （１）個人で考える。 （２）グループで考える。 【期待される学びの姿】 個人で考えを持ち、班員と資料を通して武士たちが鎌倉幕府に対して不満が高まっていったことを推測している。 （３）全体で意見を交流する。	○資料からわかる根拠をもとに、予想できるような資料を準備しておく。 ○戦い方の違いに着目することで、元軍の方が機動力に優れていることに気付かせる。 ○グループでの予想が活発に行われるような取り組みをする。 ○グループで意見を交流することで、様々な視点から捉えられるようにする。 【到達していない児童への手立て】 どの資料をもとに推測するか選択を絞り，資料からどのような予想ができるかを既習の学習とつなげて考えるようにする。
終末	15分	３　学習のまとめを行い、次時につなげる。 （１）本時のまとめをする。 【まとめ】 御家人の一所懸命のがんばりにより元を追い返すことができたが、幕府が領地を与えられず幕府への不満が高まりご恩と奉公の関係が崩れた。 （２）学習の振り返りを行い、新たに生まれた疑問を整理する。	○児童の予想した答えをもとに、まとめをする。 ○甲佐町に興味を持たせるため、甲佐町の歴史について知っていることを考え、全体で共有する。